けたハイエク

北海道大学大学院経済学研究科助教授/ 西部 忠

「無知の知」

場原理主義が勢いを増す中でハイエクはしばしば参照されら再び注目されてきた。そして,その後、新自由主義や市イエクの経済思想は、ソ連邦が崩壊した一九九○年以降か社会主義計画経済の不可能性をいち早く指摘していたハ てきた。

自足する原子的な「負荷なき個人」を前提とする偽の個人しかし、ハイエクはネオコンのいう国家主義にも、孤立 効率的な競争的市場をト 支える新古典派は、人間は合理的であると仮定して、 玉条として掲げることもしない。市場原理主義を理論的に 主義にも与しないし、まして、 ップダウン式に設計・構築するこ 伝統の因習的な保守を金科 より

> おり、 知的傲慢さを示すものである。それはハイエクの自由や市 異なっている。 場が前提とする、 主義に基づく とが可能であると考えている。そのような合理主義的個人 社会主義とは異なるとはいえ、理性への過信という 「構築主義」は功利主義を暗黙的に仮定して 人間や知識に関する考え方とは根本的

命的なうぬぼれの結果であるということになるのではな ために戦争や暴力を行使する十字軍礼賛論も、 の価値観を絶対的なものと考え、 画を可能にすると考えるハイテク科学技術礼賛論も、 そのような哲学にとっては、情報通信技術の進歩が経済計 うソクラテスを彷彿とさせる哲学が厳として存在する。 ハイエクの思想の深奥には、いわば「無知の知」とでも それを相手に受容させる いずれも致 自ら

理戦 86

グバンや冓皆女直ここっこで下である。それは、ビッ間の設計の結果ではない」社会制度である。それは、ビット(69188)、人間の行為の結果ではあるが、人 きるものではなく、 グバンや構造改革によって政府が一気に作り出すことがで るという「無知」の謙虚な自省に基づいて受け入れるべき せざる結果として生み出す、 イエクの自由市場は、 諸個人の自発的、協調的な行為が意図 人間知性には根本的な限界が 漸進的な経済社会進化の産物

イエクがいたウィ シ

リヒ・ アウグスト フォン・ ハイエク (Friendrich



西部 忠さん

A.von Hayek) は、 坩堝」の様相を呈していたのである。 潮流がひしめき合っていた。 新ウィー の精神分析学、 「論理実証主義」を標榜するウィーン学団から、フロイ ンペーターもベーム゠バヴェルクのセミナーにいた。さら は、マルクス批判を行ったベーム= など錚々たる学者がいた。経済学のオーストリア学派 には、バウアー、 頭のウィーンは、 者一族に生まれた1。彼が青年時代を過ごした二〇世紀初 開放的な場所であった。オーストリア・マルクス主義 シュリック、 、その影響を受けたミーゼスやハイエクがおり、 ン主義に至るまで、 十二音音楽を確立したシェ 一八九九年にオーストリア・ウィー ヒルファディング、アドラー、 世界でもまれに見るほど知的に多様、 カルナップ、ノイラートらを代表として 学問・思想・哲学・芸術の諸 その頃のウィーンは「文化の バヴェルクやヴィ ーンベルクらの レンナー シュ に

ちらも人間が逃れることのできない「無知」という視点に 与え、時に論争を行うそうした「知のアリーナ」から生ま 立つことで初めてそこにおける自由の意義を理解できると れ出てきた。 ハイエクの「自由主義」は、異質な諸派が相互に影響を 並行的な関係にある。 科学における論争と市場における競争は、

社会主義経済批判が ハイ エクの思想形成の核を成す

思想はだんだんと深まっていった。 ビアン協会のウェッブ夫妻らが創立したLSEにはラス のケインズに対抗しようと目論むロビンズであった。フェ になるが、 スクール・オブ・エコノミクス(LSE)に招聘され なり、そうした業績を評価されて一九三一年にロンドン・ 循環理論を研究する気鋭の経済学者として知られるように ア景気研究所の初代所長となった。ハイエクは貨幣的景気 を説得するための社会主義批判を進めるうちに自らの経済 一九三〇年代にはオーストリア学派のミーゼス、マハル 一九二七年、ハイエクはミーゼスが設立したオーストリ ハーバラーがナチスに追われて英米へと亡命すること ハイエクをLSEに呼んだのは、ケンブリッジ スウィージーなど社会主義者が多く、 彼ら た。

年に公刊された『隷従への道』(東京利元社、一九九二年)であそして、それが結実したのが第二次大戦中の一九四四

とは想像に難くない。 となっていて、ハイエる。その副題は「全体主義と自由」となっていて、ハイエる。その副題は「全体主義について次のような基本テーゼを提力はそこで、全体主義的傾向に対する反動ではなくて、その必然の結果」(同、7頁)なのであって、日独伊のファシズムとソ連の社会主義的傾向に対する反動ではなくて、その心然の結果」(同、7頁)なのであって、日独伊のファシズムとソ連の社会主義的傾向に対する反動ではなくて、その心に自由を抑圧し人間の隷属化を進める、と。社会主義がインテリの多くに受けいれられ、ソ連が英米の同盟国であった当時、このハイエクの意見が物議を醸すものであったことは想像に難くない。

66

その結果、一九六〇年以降のハイエクの研究は経済学ではその結果、一九六〇年以降のハイエクの研究は経済学ではされない方面極端な評価を受けて、自分がまともな学者であるという両極端な評価を受けて、自分がまともな学者であるという両極端な評価を受けて、自分がまともな学者であるという両極端な評価を受けて、自分がまともな学者であるという両極端な評価を受けて、自分がまともな学者であるという両極端な評価を受けて、自分がまともな学者であるという両極端な評価を受けて、自分がまともな学者であるとの基本テーゼを背後で支えるのは、「適切に運営されて、それを確実なものにする必要をも強く感じていた。 この基本テーゼを背後で支えるのは、「適切に運営されて、それを確実なものにする必要をも強く感じていた。 この基本テーゼを背後で支えるのは、「適切に運営されて、それを確実なものにする必要をも強く感じていた。 というもうにいた。

ズアップされてくる。

場社会における自生的秩序が成立するという議論がクローり、ルールの範囲内で行為する自由な活動の結果として市の社会的ルールである法=ノモスに従う必要があるのであの社会的ルールである法=ノモスに従う必要があるのであい。では、理性に限界があるからこそ、人間はふるまいは会における自生的秩序が成立するという議論がクローサードという。自生的なく、法学、政治学を含む社会哲学へと移行した。自生的なく、法学、政治学を含む社会哲学へと移行した。自生的なく、法学、政治学を含む社会哲学へと移行した。自生的なく、法学、政治学を含む社会哲学へと移行した。自生的なく、法学、政治学を含む社会哲学へと移行した。自生的ない。

からだ。 就論こそ彼の自由主義論の出発点であり、その基礎であるい。なぜなら、社会主義経済計算論争におけるハイエクの行った社会主義経済計画批判をまず知らなければならなを理解するためには、一九三○年代の経済学者ハイエクがしかし、そうした一九六○年以降の自由主義者ハイエクしかし、そうした一九六○年以降の自由主義者ハイエク

社会主義経済計算論争

> 此判の対象とするものである。 にソ連邦は成立し、その前年から市場を導入する新経済政 第一次五カ年計画を実施し、重工業に重点をおく工業化と 農業の集団化を推し進めた。そして、一九三〇年代に生産 農業の集団化を推し進めた。そして、一九三〇年代に生産 農業の集団化を中央集権的計画を特徴とするソ連型社会主 義体制が確立する。これは、当時のマルクス主義者が考え ていた典型的な社会主義像であり、ミーゼスやハイエクが 批判の対象とするものである。

は主張した。 は本さに は、経済とは非常に大規模で複雑なも できず、動態的な状況での資源配分や技術選択も困難にな できず、動態的な状況での資源配分や技術選択も困難にな できず、動態的な状況での資源配分や技術選択も困難にな できず、動態的な状況での資源配分や技術選択も困難にな ないのだから、貨幣なき実物的計画は不可能だとミーゼス ないのだから、貨幣なき実物的計画は不可能だとミーゼス は主張した。

イエクは、このミーゼスの考え方を基本的に受け継い

の焦点を絞った。今や、計画経済の論理的不可能性ではな る集産主義均衡価格を求めることはできるかどうかに議論 ネの議論を受け、 能性を説いた。しかるに、ハイエクは、イタリアのバロー は貨幣評価は不可欠という視点から社会主義の論理的不可 実行可能性が問題なのである。 ずることによって、すべての財の需要と供給を等しくす イエクの見方にしてもそうである。 がいくらか変わった。ミーゼスは大規模な分業社会で 市場社会とは「大きな社会」であるという、 実際の市場を用いずに一般均衡理論を応 ただし、批判のポイ 後の

ならない根本的な事実である。これが変わることがない以知の知」はわれわれが社会を編成する際、考慮しなければには大きな限界があるということを知っている。この「無 性を持っているが、問題はそれがどの程度かという点にあ 何かということである。人間は猿に比べて遙かに高等な知ここでハイエクにとって重要なのは、人間の根本条件は の限界を認識せず、傲慢にも自らが万能であるとうぬぼれ 上、われわれは市場を使わざるをえない。しかるに、理性 仮に人間が神のように万能であり、その理性に限界 現実にはそうでない。そして、われわれ いならば、社会主義的経済計画は可能であるであろう 貨幣を廃棄して現物単位で経済を計画しうるという は人間の理性

> う。ここでの「社会主義」とは、生産手段の公的所有と経 幻想が生じる。 家社会主義を指している。 済の集権的計画という二つをメルクマールとするソ連型国 ハイエクの社会主義批判の大筋はこうなろ

人間理性の限界

味するのか? を見ておきたい。 義」(「九四六)で個人主義を二つに区分する。 では、人間の根本条件である理性の限界とは何 ハイエクは、「真の個人主義と偽の個人主 まず、 そ を意

集三、十二頁)である。それは「個人の知性の諸制限について 解」(「真の個人主義と偽の個人主義」『個人主義と経済秩序』ハイエク全 部分的にのみ理性によって導かれるのであり、人間の個人 批判的合理主義的な個人主義のことである。 る謙虚な態度を導く」(同上)ような、 創造に参与させる、非人格的な無名の社会的諸過程に対す の鋭い自覚が個々人を、彼らの知識を超えた偉大な事物の かわらず、 的理性は極めて限定され、不完全であるという事実にも ハイエクがいう真の個人主義とは、「理性が人間の営 いて果たす役割を一般的にむしろ低く評価し、 人間は現在もっているものを達成したとい 反合理主義的な これ は · う 見 口 17 ッし

想家であるド・トクヴィル、イギリスの歴史家であるアク スコットランド啓蒙思想家、十 クに始まり、マンデヴィル、ヒューム、タッカー、ファ 、ソン、スミス、バークなど十八世紀の英国思想家、特に ン卿が唱えたものである。 -九世紀のフランスの政治思

接の結果であり、 また人間が達成するすべてのことは個人の理性の支配の直ねに完全にかつ平等にすべての人間に通用すると想定し、 会が構成されるとみなす社会契約論的個人主義である。こ 義、あるいは、すべての個人間の意識的な契約を通じて社 は何でもすべて軽蔑する」(同、九-+頁) 合理主義的個人主 されたものでないもの、もしくは十分に捉えられないもの 信頼を置き、その結果個人の理性によって意識的に設計 想定する」(同上)見解であり、「個人の理性の力に過大な これに対して、偽の個人主義とは、「大文字の理性がつ や百科全書派の唱える「個人主義」である。 近代合理主義の祖デカルト、啓蒙主義者であるル したがってその支配によるものであると

(…) 彼が事実上関心を持つことができる人間の必要は社会 小さな一部分を知るだけでそれ以上のことはなし得ない、 ハイエクは、「一人の人間の知識と関心には本来的な限 ある (…)、すなわち、 べての構成員の中ではほとんど無視しうるほど小さな 一人の人間は社会全体のほんの

> とつの知的な事実」(同、十六頁)から出発する。これは、個 部分にすぎない」(同、十七頁)という「議論の余地のない ある」(同上)。このように、真の個人主義に基づく自由主 ある。よって、「理性は、ある人の貢献が他の人 一の個人も、社会の構成員の知識の大部分について無知 人が利己的であろうが、利他的であろうが関係ない。 の自生的秩序とみなす。 て評価され、修正されるというような人間相互間の過程で 才能と技術とは無限に多様であるので、その結果どの単 社会制度を意識的設計の産物ではなく、 個人の行為 人々によ つ で

認知・計算・実行における限界

ベルに現れる。 り具体的に、すなわち、認知、 争に戻って考えてみよう。ここでは、 次に、人間理性の限界という問題を社会主義経済計算論 計算、 人間理性の限界はよ 実行という三つ 0)

致する生産量をこのTシャツを生産する工場に割り当てれ 場に何をどれだけ生産すべきかを指令する。 満たしうる生産計画を建て、それに基づいて各産業や各工 計画経済では、 シャツに対する社会全体の需要がわかれば、 中央計画当局がすべての人々のニーズを 例えば、 それに一 ある

69

する注文を定期的に取って、それを集計しなければならなばいい。だが、そのためには、全消費者からTシャツに対 材質やデザインごとに別の種類のTシャツであると考えな 大な数の財やサービスが存在する。 ればならない。もちろん、社会にはTシャツだけなく、 もちろん、Tシャツといっても一種類だけではなく、

的には可能でも、 満たす時、この連立方程式を計算により解ければ、 る。このうちの一本は独立ではないから、財の数マイナスうな方程式を立てれば、財の数だけの連立方程式系ができ ることができる。 としてある一つの財を価値尺度財とする相対価格体系を得 させる価格と数量の組を求めることは可能である。 が独立 0 なぜハイエクはそのように言うのだろうか? |財に関して価格を変数とし需要と供給を等しくするよ 夕が完全に与えられれば、全商品の需要と供給を均衡 ローネによれば、生産技術や消費者選好などの関連 な方程式の数である。したがって、一定の条件を ハイエクはこのような数学的解法は論理 人間にとって実行不可能であると論じ 均衡解 すべ

一三桁で、 であると言われている。 が付いている。日本で標準化されたJANコ と言われている。商品には商品情報を記録したバーコンビニー店舗が取扱う商品数は約三〇〇〇種類 そのうち七桁は会社、三桁はその会社 こードは

理戦 86

類の財に関する一億主体からの供給と需要を知る必要があ 産者である企業の数と消費者である国民の数の合計を一億 る。 とすると、数学的解法による経済計画の策定には、 コードとなっているから、 ○桁で国内商品種類を表していることになる。 て使えば最高一○○億種類になる。むろん、 つと少ないはずだ。いま商品種類が一億であるとし、 会社と商品コードを合わ これ 一億種 、をす に せ 7 は

模で分業が進んだ経済では、その経済運営に必要な情報も 計画局へ集めることは仮に不可能でないにしても、その労 集約するには無理がある。 過程でどういう技術を使っているかは、現場の監督や労働 あちこちに分散しているということを意味する。ある生産 力は途方もないものであろうと想像できる。これは、大規 知識も分散して存在することになる。それらすべてを中央 情報収集能力と認識能力の限界のためにそのわずかな部分 ても空間的に分散しているので、 者は知っていても、 は日本中にバラバラに存在しているから、それらに関する たして可能なのだろうか? 一億種 そんな大量 なのに、そうした知識をすべて中央計画局 のデータを収集し、 同じ会社の社長や株主すら知らない 情報はいまどこかに存在してい 一カ所に集約することは どのような個人や組織も 類の 一億の主体 だ

知」と呼んでおく。 知 の形を取る。これを「知識の空間的分散性に基づく無 は知りうるのに、実際的には知りえないという「無りえない。それを個人や組織の視点から見れば、原

現時点で将来の需要を正確に予想することはできない。 ニングが生じ、急に新しいTシャツが入用になるかもしれか? 転んでTシャツを破ってしまったというようなハプ 来月必要なシャツの需要量をいま知ることができるだろう る「リスクに関する無知」である。 できるならば、これは保険制度により対処することができ かし、こうした事故の発生確率を確率的に予測することは ない。こうした事態が生じる可能性は必ず存在するので、 問題はもっと根本的なところにある。消費者は L

技能によって生産活動は担われ、 て夕食のメニュ なものでも明確なものではなく、 も不明確なのではないか? つているのだろうか? の長年の経験とそれにより培わ 夕食のメニューが決まることはよくあるし、のである。スーパーの店先で食材の新鮮さや る。 9確なのではないか? 人の欲望は必ずしも固定的いるのだろうか? それよりも、いま何を食べたい一週間後の夕食で自分が何を食べたいかを自分は 技能や熟練には、 (まることはよくちる)、!-の店先で食材の新鮮さや安さによっ-の店先で食材の新鮮さや安さによっ どうやればい 生産技術も日々改良され れたカンやコツを含めた ζJ かは知っ て ζj

> にして」の知識 (knowing how) を区別したが、後者が「暗黙「である」の知識 (knowing that) と遂行方法に関する「いか中に「暗黙知の次元」が広がっているが、それは言語的に中に「暗黙知の次元」が広がっているが、それは言語的に動車や自転車の運転、泳ぎ方、楽器の演奏、人相や表情の動車や自転車の運転、泳ぎ方、楽器の演奏、人相や表情の も思える知識の中にも暗黙的な次元が存在しているはずで知」に相当する。したがって、技術や嗜好という客観的と 知」の問題が浮かび上がってくる。 困難である。かくして「知識の潜在性・暗黙性に基づく する情報を「与件」として事前に入手することは原理的に ある。技術や嗜好は時々刻々と変化しており、それ てのみ存在するものが多い。マイケル・ポランニー を言葉で人にうまく伝えられ ない「暗黙知 らに関 とし

率的に予測することもできない。 方が正しい た克服不可能な根源的な「無知」 商品、新技術は現時点では存在してい りきらないものもある。イノベーションにより登場する このように、無知には様々な種類があるが、それに収 新奇性」として表れるかについては何の知識も持ち得 であろう 生起確率も原理的に定義できない。 は ζj むしろ つどういう技術や商品 ない いが、それらを確により登場する新 「未知」 そう ま

組み合わせを選択したら、それ以上探索をやめるのかもし ことになるかもしれない。 能であろうか? が最も満足する組み合わせを購入することなど果たして可 満たされるかどうかを考えよう。 するという、 に い。だとすれば、 っているなら、コンビニの中で何時間も考え続ける 企業は利潤を最大化する、消費者は効用を最大化 物をするとして、三千種類もある商品 新古典派理論の最適化に関する仮定は現実に われわれはコンビニで頭の中で最適化計 われわれは、消費において最適化 むしろ、 われ 一定の満足度を超える われがコンビニで千 いら自分 で

ても、 に嘘や誤魔化しをしないための条件は何かなど、 は生産過程の単位毎に生産を実行させなければいけない。 になるであろう。そして、仮にその価格が算出され ものなので、 らない。机上の計算は論理的に可能だが、 はなく満足化を追求しているのである。 (々は創意工夫や革新に努めるか、自分に都合の 最後に、仮にすべての情報が集められたとしても、 それに基づいて指令を出して、各工場単位、 の問題がある。また、 計算量は実用には適さないほど膨大なもの 階層型組織における権威主義と官僚制 指令通りに人々が動くための 財の数が膨大な インセン 47 あるい いよう たとし

がある。

72

知全能性を仮定し、それに基づいて経済計画 な全知全能性の仮定を批判する。彼は、 「無知」と呼び、 限界がある。 えてしまう誤りを犯してしまうことを鋭く批判したのであ 合理主義哲学や啓蒙思想と同じく、 て、この無知の偏在性を強調することによって、 結局、 認知、 ハイエクはこのうち初めの認知の限界を特に 計算、実行という三つのレベ 彼の社会主義批 判の中心に据えた。 遅かれ早か 社会主義的計画が が ル 2可能だと考 れ人間の全 で人間には このよう そし

市場社会主義論

ことで中央計画当局による計画を試行錯誤的なシミュレ 型社会主義経済ではない。 論者が擁護する社会主義経済が集権的計画経済から分権的 して、 ションで代行できるというモデルである。 な市場社会主義 「分権的」とは言っても、 な市場社会主義のプロト 社会主義陣営の側から反論が行われた。その際、反 エクの一九三五年の編著における計画経済批 (market socialism) へと次第に変化した。 擬似的市場を構成 ·タイプになる。 実際の市場を導入する分権 これはその後 して利用する 判に対 しか 0

義経済を擁護するという極めて巧みな戦略を使った。こう ミーゼスやハイエクが考えていた市場の捉え方を受け入 して、新古典派を社会主義擁護派に引き入れた。 あったワルラスの一般均衡理論を使うことにより、 な近代経済学者であったので、当時の経済学の最新理論で る所謂近代経済学者であった。 や社会主義にも造詣は深かったが、一般均衡理論を研究す 二人にちなんで、 う前提を認めた上で、 ・ル」とも呼ばれている。ランゲやラーナーはマル 市場は希少財や生産資源を配分するシステムであると というLSEでのハイエクの同僚の経済学者である。 ランドの経済学者と、 Ō 論者として有名なのが、 市場社会主義は「ランゲ=ラーナー 市場を模倣すれば計画的配分は ロシア生まれのアバ・P・ラー ランゲやラー オスカー ・ランゲという ナー 彼らは、 社会主 ・は優秀 クス ・モ

為的に実行できると主張したわけであ

『ライバル競争と中央計画―社会主義経済計算論争再考』 リア学派の、 言われてきた。それをひっくり返したのは、 やラー あったことを物語っている。 な近代経済学者も社会主義を擁護していたということであ 面白いのはマルクス経済学者だけではなく、 での議論であった。 これ ゼスやハイエクなど社会主義批判者がむしろ少数で ナーがミーゼスやハイエクを論破したと、近年まで は、 当時、 特にドン・ラヴォアが一九八五年に出版した 社会主義がかなり広く浸透しており、 実際、この論争では、ランゲ 現代オースト 彼らのよう

いう論文で、 ランゲは「社会主義経済理論について」(1ヵ三六-三七) プライス(陰の価格)を設定し、 中央計画当局が公有化された生産財にシ 超過需要にある財 の価 ヤ

理論戦線臨時増刊

◎山崎カヲル◎山本耕一◎吉田憲夫◎石塚良次◎高橋洋児◎野家啓一◎高橋哲哉◎高橋順一◎西谷修◎木前利秋

気鋭 に架橋する知のラジカリズム。哲学 ブームにあきたりないあなたに贈る。 の現 代思想家らによる2世紀 本体価格

1000円 実践社 〒335-0002 埼玉県蕨市塚観2-18-6エピステーメ 1EL:048-431-1804 e-mail: mail@jissensha.co.jp URL http://www.jissensha.co.jp/

理戦 86

倣できることを示したのであった。 担わせることで、一般均衡理論のオー 錯誤的に変化させれば、最後に一般均衡価格が得られ 需要と供給が一致するまでシャドープライスの体系 と論証した。 (オークショニア)を実在化させ、その役割を中央計画局に 超過供給にある財の価格を下 いわば、仮想的存在であったワルラスの競り クション型市場を模 **ッイスの体系を試行** 下げ、すべての財の るこ

実行する上で問題とされた人間理性の限界を克服できると を動かしさえすれば、市場を模倣できるので、 にとって情報収集と計算という両面でかなり重い負担が誤当局に集約して紙の上で計算しなければならず、経済当局 当局に集約して紙の上で計算しなければならず、経済当局ランゲ以前は、中央計画編成のためにすべて情報を経済 いうことを明確に示したわけである。 せられていた。しかし、 経済計画当局がせり人として価格 経済計 画を

経済の欠点を除去しうるから優れていると述べている。 財における「市場の失敗」を克服できるなど、競争的市場 よう所得分配を決定できる、外部効果、規模の経済、 と信じていた。市場社会主義は、社会的厚生を最大にする はなくて、 ランゲは、 むしろ理想的な市場社会主義経済を描いている 一般均衡理論は資本主義の競争的市場経済 公共 で

ンゲの議論のもう一つ重要なポイントは、 今で言うコンピュータに関わる。 膨大な情報を処 高速の電子

> があっても、 作ったデジタル・コンピュータはなかったので、という議論を展開したわけである。しかし、当時 いうのがランゲの市場社会主義論なのである。 カニズムの計算方法を中央計画当局が模倣すればよい、 天然のアナログ・コンピュータとして利用している市場メ を克服してくれれば、合理的経済計算が実行可能になる、 力を持っている、したがって、飛行機を作ってそれを操縦 間は空を飛ぶことはできないが、 理し計算で答えを出すのは人間にとっては無理だが、 ュ れば空を飛べる。同様に、人間の認知・計算能力に限界 ータなら可能だろうと考えられる。 人間が製造するコンピュータがそういう限界 鳥を見て飛行機を作る能 喩えて言えば、 当時、 仕方なく 人間が コ

ンピュータであると考えられる」(「九一-一九二頁)と述べ場は連立方程式体系を解くための自然により与えられたコンピュータに打ち込めば、瞬時に解を得るだろう。(…) 市答えると述べている。「連立方程式をエレクトリック・コで、ハイエクやロビンズの批判には「それがどうした」と 論文を出しているが、その時には既にコンピュータは存在ランゲは後に「コンピュータと市場」(「九六七)という だから、 ランゲは、 **論文を書き直すなら仕事は簡単**

世界初の実用コンピュータが何であるかについ ては V 2

理戦 86

規模な経済運営に対して、コンピュータを使えば市場は必コンピュータは存在していなかった。にもかかわらず、大る。よって、ランゲが先の論文を書いた当時はまだ実用NIACが開発されたのは第二次大戦後の一九四六年であ エクの「無知」の克服がこうしたコンピュータ・ネ場メカニズムの代替の可能性は増大しているはずだ。 ピュータではなく、コンピュータ・ネットワークによる市あれば、POSやインターネットがあるので、単体のコン要ないのではないかという議論が既になされた。現在で の意味で、 . クの「無知」の克服がこうしたコンピュータ・ネット。メカニズムの代替の可能性は増大しているはずだ。 ハイ 説があるが、その中で最有力候補であるアメリカのE クの技術的利用により可能になるのかどうかという問 社会主義経済の存立可能性に深く関連している。そ この論争はまだ現代においても続いていると言

知識の 「分散性」と「暗黙性」から生じる「無知

題の解決はコンピュータの技術進歩次第ということであろ 現できれば、「無知」が克服できるというのであれば、問のではない。情報転送量の大量化や計算の高速化さえ実 ただ しかし、 し、核心の問題は技術で解決できるほど単純な 既に述べたように、 情報転送や計算の前 にど 8

> 本的な問題であった。 報は言語で書き下すことができるのかということがより が、情報は「既にある」と言えるのか、 うやって技術や嗜好に関する情報を収集するかが問題だっ 「収集」とは、既存の情報を集めるという意味になる 暗黙知のような情

よって形成される側面がある。 ことが多い。そういう意味で、人間の欲望そのもの にあやふやで曖昧であり、 は物を自分の目で見てからしかそれを欲しいと感じな人間の欲望は予め頭の中に「ある」のではない。われ 外部からの刺激や社会的関係に が非常 いわ

定される。マーケティング活動などを利用して漠然とした買うかどうかにより、それが受け入れられるかどうかが判 に突然投入されることで人々の欲望を喚起し、その商品をれるのではなく、供給者が開発した新製品や新商品が市場経済では消費者が欲しいと思うものが新商品として開発さ 定される。マー 需要を最初から明示的に示すことはできない 創造している。 欲望を予期して新商品を開発し、新商品への欲望を広告や これはイノベーションにも関係してくる。 シャ ルによって刺激していくことで、 したがって、イノベー ションでは、 市場で需要を 今の資本主義 欲望や

ける技術や需要関数における選好に関するデータが与件と このように、 経済計算問題の前提として、 生産関数にお

75

理戦 86

性を表している。 ないし「暗黙性」という問題がさらに横たわっている。 言葉で表せず暗黙的 (tacit) といった、知識の「不明瞭性」 に存在しているので「収集」するのが困難であるという、 比するために使われていて、 の知識」という語は、それを科学的知識や技術的知識と対 根本には、知識自体がぼんやりとして不明確(inarriculate)、 知識の「分散性」ないし「局所性」がある。そして、より して存在する、 イエクのいう「ある時と場所における特定の状況について 確かに社会の中に存在するが、様々な場所や人の中 と素朴に考えることは正しくない。 知識の分散性のみならず暗黙 人間の ハ

財の最適配分メカニズムを論理的に構成する一般均衡理論 場社会主義論は、経済主体の最適化原理を前提とする稀少 的合理主義、 分機能を果たす計算機械とみなすという点でも、デカルト を利用するという点でも、また、現実の市場をそうした配 にいかに対処するかという問題を突きつけた。ランゲの市 う形を取ることで、 にと言える。 の重点を変化させずにはいられなかった。 ハイエクの計画経済批判 知識の分散性」から「知識の暗黙性」へと移って行重点を変化させずにはいられなかった。無知の根拠 偽の個人主義の立場からの強力な反論であっ ハイエクはそれに再反論を行う過程で、 人間の「無知」をい は人間理性への過信 かに認識 の批 批判とい

> telecommunication)」から 意図せざる結果として徐々に「進化」していったのがわか はわからないが、 と焦点が移動した。ハイエク自身も意識していたかどうか き、市場の機能についても「情報伝達システム (a system of 端から見る限り、 「知識の発見過程としての競争」 ハイエクの市場像は \sim

市場とは何か?

である。 支え合いながら発展したと言える。 者はパラレルに発展していく。その意味で、 れた。市場社会主義論は一九三〇年代に出てきたので、 代から四○年代ぐらいにかけて興隆してきた一般均衡理論 会主義が可能だという市場像を提供したのは、一九三〇年 は、当時の主流派経済学理論の中に存在していた。市場社ランゲ=ラーナーの市場社会主義の実行可能性の論拠 ルとして洗練され、一般均衡の存在やその安定性が証明さ 一般均衡理論は一九五〇年代以降、抽象的 両者は相互 なモデ

件とされたデー や嗜好に関する情報と初期の資源配分の与件性にある。 率的配分のための価格メカニズムと考える市場像と、 一般均衡理論の基本的な前提条件は、市場を希少財の効 タを前提にして、需要関数や供給関数が希 技術 与

得られる結果に達することができるという意味で、市場メ べての経済主体が最初と同じか、それよりも大きな満足を 要するに、市場における価格調整が伸縮的であるなら、す 格の組が存在し、その均衡解が安定であることが示せる。 ような効率的(パレートの意味で)な資源配分を可能にする価 体の厚生が現状より良くなるか、せいぜい悪くはならな 少性に関するある一定の条件を満たせば、すべての経済主 カニズムの効率性を示したというわけである。

う結果、非効率性が蔓延する。こうした現象は旧社会主義 業も国家による温情主義的政策によって存続しうる結果、 ある。不効率な経営を行い大きな債務超過に陥った国営企 格情報を歪めてしまう可能性があるという問題である。こ の試行錯誤法において、 る。誘因両立性の問題とは、利潤という誘因を欠くランゲ に述べた「知識の暗黙性」の問題と誘因両立性の問題であ 論の欠点のひとつである。 国でもかなり広範囲に見られたものであり、 予算制約が実効的でなくなり、コスト意識と競争意識を失 市場社会主義の場合、実行上最も問題となるのは、 コルナイのいわゆる「ソフトな予算制約」と同じで 生産者が嘘の申告を行うことで価 市場社会主義

題に関わる。 もう一つの論点は、そもそも市場とは何なのかという問 一般均衡論的な市場像では、 市場とは効率的

> まり、 の無知を社会的に克服するために必要な制度とみなす。つ識の裏側にある無知の問題と関連させれば、市場を個人エクは、市場を効率的な情報伝達システムと捉えるが、知るが、ハイエクはもっと広い視点で市場を見ている。ハイている。これは市場を功利主義から機械論的に理解してい 規定するものなのである。 意味を持っていて、これは、経済社会の在り方を根底的 資源配分を可能にする均衡価格の計算装置であると考え ルールを前提とする情報伝達のための社会制度という 市場は効率性達成を目的とする価格計算装置ではな に

division of knowledge が達成されると説明した。アダム・ そして一九四五年の『社会における知識の利用』で、 of labour を促す仕組みであるという見方を提示したとすれ という情報伝達システムの利用によって知識の分業(分知) 達システムとしての市場という見方を摂取している。 ではない。実際、現代の情報の経済学はハイエクの情報伝 れは必ずしも一般均衡理論の市場の見方を反駁するもの 伝達・流通する仕組みとして捉えたと言える。 スミスが『諸国民の富』で、 ハイエクは、一九三七年の有名な論文『経済学と知識』、 ハイエクは市場を分散化された知識をうまく集約して これは、 「知識の分散性」による無知と分知を対 市場を社会的な分業 division しかし、こ 市場

識がいかに発見されるかという動態過程を捨象してい 象とするものだが、「知識の暗黙性」との関連で新たな知 市場社会主義論への根本的な批判を構成しない るの

似ている。 資本主義経済批判から古典派経済学批判に向かったことに をたどった。それ いが、社会主義経済批判から新古典派経済学批判という道 意味する。ハイエクはどこまで意識していたかはわからな するということは、 論そのものを批判することに向かう。 一般均衡理論を批判 場社会主義論を批判するために、それを支える一般均衡理 社会主義経済計算論争への参加後、 は、逆方向であるとはいえ、マルクスが 当時の経済学の主流を批判することを ハイエクはさらに市

えている。 ことを目指した制度設計の提案であるのだから、それこそ 品準備貨幣や貨幣の非国有化は自由を広げ競争を促進する 任主義でよいと考えるわけでもない。 からといって、設計という概念を完全に捨て去り、自由放 象になってしまう。ハイエクは人為的な設計を嫌うが、だ 「構成主義」ないし「構築主義」に変えたほうがいいと考 と訳されているが、私は、これは適切な訳語ではなく、 イエクが批判する constructivism は一般に「設計主義」 「設計主義」ではないかと批判されかねない これでは、 いかなる設計 (デザイン) も批判の対 実際、 ハイエクの商

> ある。 まり、 適する条件を作りだす」ための人為選択に相当しよう。 遂行するというのならば、それらは、「樹木の成長に最も がインフレー 者の社会に対する態度は、樹木を育てる庭師のようなもの くのことを知る必要がある」(『隷従への道』二十五頁)。「庭師」 であって、樹木の成長に最も適する条件を作りだすために 樹木の構造とその機能の仕方について、できるだけ多 独占 ハイエクは進化論的な制度設計を是認しているの の防止または統制などの多くの明白な任務」を ハイエクは次のように言っている。「自 ションや独占を防止するため、「貨幣制度の 由 主義 つ で

例えば、現実の市場に見られる非効率性や不安定性を無く ぶっ壊して、 実現しようというような革命思想こそ、構築主義を背景と すために、それを一気にひっくり返して計画経済によっ 社会や制度を構築しようとする場合の意識的設計である。 して出てくる点を批判しているのである。 批判 しているのはあくまで現在の社会や制度をすべて 何らかの基準に従ってゼロから一気に新たな て

般均衡理論批判から社会哲学へ

現時点から見ると、 一般均衡理論を批判する論点は ζý <

理戦 86

理論は貨幣を価値標準か交換手段としてしか導入していながある。現実には貨幣なき市場は存在しないが、一般均衡 ける必要がある。しかし、 う理解し、それをどう批判するかという問題でもある。 '。しかし、市場理論の中に貨幣理論をより適切に位置づ 第一に、市場のビジョンをどう考えるかという問題があ かある。 ハイエクは主として一般均衡理論批判の中でこの問題 り組んだ。第二に、貨幣をどう考えるかという問題 現代において新古典派経済学のハードコアをど ハイエクは、社会主義批判や一

論考の中で述べているのは、暗黙知や未知を新たに発見す にそれ である。 る手続きこそ競争であり、 きとしての競争』という論文を発表している。この一連の で相互に伝達されるネットワー ハイエクは、 を洗練した議論として、一九六八年に 一九四六年に『競争の意味』を書き、さら 発見された知識が経済主体の間 クが市場であるとい 『発見的手続 ・うこと

をするため、 動態過程を含まないと批判する。 ハイエクは、 市場を計画経済に置き換えることが可能であ 一般均衡理論の市場は非常に静態的 そうし た狭い 捉 ええ方

> な論点の一つが、先述の「知識の暗黙性」である。 捉え方をもっと広げるならば、計画経済で代替可能 分が多くあることを認識しうるはずである。その中で重要 はあくまで市場の一部分でしかなく、置き換えられ るかのような市場社会主義論が生まれる。しかし、市場 ない なも 部 ŏ

competition)」とは全く異なる意味を持っている。 ここでの「競争」は、一般均衡理論の「完全競争 (perfect 黙性」を掘り出し、知識として発見する過程ととらえる。 を認識しないのだから、そのような問題はないと主張する 状況を表しているからである。 調整されており、 争の不在を意味する。なぜなら、それは経済活動が完全に によれば、「完全競争」は、その言葉にもかかわらず、競 だろう。ハイエクは、それと異なり、 しているのか? 一般均衡理論は「知識の暗黙性」の存在 「知識の暗黙性」に基づく無知を市場はどうやって克服 外的攪乱がなれば何も起こらない 競争を「知識の暗 ハ 静態的

般均衡理論批判との関連では、貨幣を主題的に扱っていな

前者の問題が、一般均衡理論を超える問題構成

へとハ

イエクを導いていく。

である。それは、 「ライバル競争 (rivalry)」という語で表そうとし ハイエクの言う「競争」は動態的過程を表し、ラヴォ だ状況を意味する。 その実現のために一定の資源をめぐって競合してお の意思決定が両立しないため対抗性や敵対性をも 多数の主体が目的と動機において相対 たも の P

は、イノベーションを「創造的破壊」や「新結合」として シュンペーターの経済学と親近性がある。 の発見過程の理論は、イノベーションを中心概念とする 済学者であるシュンペーターが活躍した。 |学者であるシュンペーターが活躍した。ハイエクの知識ハイエクとちょうど同時並行的に、オーストリアの経 それが資本主義の本性的な動態性を特徴づけると主 シュンペーター

理戦 86

うした市場過程において初めて、知識の暗黙性や不明瞭性 べて「発見」されなければならないのである。つまり、こ 「所与」とされた情報や知識はライバル競争過程の中です 成される。 理解され、その結果、静態的均衡ではなく自生的秩序が形では、ライバル競争が知識の発見過程、発見手続きとして 市場を「分散的市場」と呼ぼう。すると、この分散的市場 とは異なり、 いによって商品の購買取引が個々バラバラに行わ 財の希少性や種類、技術や嗜好といった一般均衡理論で 一般均衡理論のようなセリ人がいるオークション型市場 取引の集積体としてしか把握できないネットワー 貨幣がストックとして存在し、 貨幣に よる支 れるた · ク 型

ことにより、市場の均衡化を促進すると解釈する。 を見つけ、「安く買って高く売る」という裁定取引を行う き「機敏さ」という観点から、企業家が機敏に利鞘機会 る。オーストリア学派のカーズナーは、企業家が備えるべ きという意味を持つ。 し、それは知識の発見過程を一般均衡へ収束するまでの一 知識の発見過程としての競争には色々な解釈がありう 経過的不均衡として理解することに他ならない。 しか

れらが明示化され明瞭化される知識の発見過程、発見手続 が全面的に主題化される。こうして、ライバル競争は、そ

注目した。ハイエクが強調しているのは、シュンペーター小さな無数のイノベーションが動的秩序を形成することに 部分はあるが、あまり明示的には言及していない。 ができる市場の力である。 とは異なり、 するメカニズムに注目したが、 ーターが大規模なイノベーションの群生が長期波動を形 ハイエクの議論もシュンペー 日々の小さな熟練や品質改善を引き出すこと ハイエクはより局所的で ター ていない。シュンーを意識している

達可能な明示知として多種多様に創出する「未知の知への (ジェネレーター)」であると同時に、カーズナーが言うよう 変換機(コンバーター)」あるいは「新奇性・多様性の発生機 シュンペーターが言うように、暗黙知や未知を認識・伝 して理解すべきであることがわかる。市場は、 市場を通じて伝達される「無知の知への変換機」でもある4。 こうしてみると、市場は多様な意味と機能を担う制度と 多様な知識の有用性や希少性が競争を通じて発見され ハ ハイエクや

イエクの転換

いう論文以来、ハイニー九八八年のコール と議論されるように イエクは重要な節目で大きく変化した になった。 ルドウェルの「ハイエクの転換」5と 一九三六年に発表した 『経

> ポリティカル・エコノミー』6において、さらにもう一つ、 意味する「情報伝達システム」を補完する「ふるまいの社 確実性を克服する社会経済秩序を考察するために、市場を なると主張した。フリートウッドは、ハイエクが無知と不 スの経済学者スティーヴ・フリートウッドが『ハイエクの 大きな転換点であると考えられ、それ以前とそれ以降が済学と知識』が知識を経済学の対象とするアプローチへの て準批判的実在論へ移行したと論じている。 会的ルー 一九六○年に第二の転換点があり、その後はハイエクⅢに イエクⅠとⅡとして区別された。一九九五年にイギリ それを経済学の対象に据えうるような哲学的立場とし ル」(social rule of conduct) という深層構造の実在を認

おらず、 発表している。 はないだろうか。 では狭すぎると考えたからこそ、ハイエクは経済学の枠を 流になっていた一九五〇―六〇年代当時の経済学の枠組み 題意識が一貫して保たれていた。むしろ一般均衡理論が主 ている。しかし、ハイエク理論の根底には、それ以前の問 ハイエクは一九六〇年に『自由の条件』という三巻本を 社会経済学とでもいうべき分野を開拓 これ以降ハイエクは政治哲学に向かったと言わ 一般にこれは経済学の書物とは考えられ し始めたの 7 れ

こうした問題意識の広がりの中で、 ハ イエクの 自由をど

「無知」であるならばどう振る舞うかを問題にし、「ふる

82

ば、合理性に限界がある経済主体の意思決定や行為をいか今見たように、最適化計算が事実上不可能であるなら 思想に近づく。 己組織的に形成するかを考えようとする点で、 そうした経済主体がいかに相互作用して、 は、実在する主体がルールや慣習に従い、一定のルーティ にモデル化するかが問われる。進化経済学や複雑系経済学 ンや定形行動を行うような限定合理的な主体を仮定する。 一定の秩序を自 ハイエクの

ていると見ることもできる。つまり、無知であるがゆえに

が必要で、その中でこそ自由が生じる、

という議論

逆に言えば、それはルールによって自由の領域を画

になっている。これが

ハイエクの議論のもう一つのコア

ルールは禁止という形でわれわれの行為の限界を画する で実際にどう振る舞うかに関して自由が与えられている。 自生的秩序が生まれた結果、人間はその内部においてルー 整されて秩序を維持することができる。そうした安定的な 利害の点で衝突することなく、多数の個人の行為が相互調 無知が引き起こす種々の厄災を回避するとともに、動機 ない。だから、社会的ふるまいのルールを遵守することで だけで考えて合理的な行動を取ろうと思ってもうまくいか エクは、次のように考えた。人間は無知だから、自分の頭 年以後の、フリートウッドの言うハイエクⅢである。ハイ まいの社会的ルール」について論及し始めるは、一九六○

ルが許す一定の自由を確保する。人間はル

ールに従った上

P

消極的な自由

「無知」や「反合理性」という視点に戻らなければならな 由の意味について考えるには、ハイエクが提起した

めにこそ、

事実的に抽象的・一般的・規定的なものとして存在し続け 来の哲学的立場を放棄して準超越論的実在論へ移行したハ る。要するに、社会的なルールや制度一般を実在として認 そうでないこともあるが、そうした結果に関わりなく、 めるようになった。ルールは規則的パターンを導くことも む想念 (conception)、 (event) /行為 (action) しか実在と認めていなかったが、従 よれば、経験的実在論に立つハイエクⅡは経験的な事象 体の外部に自存しているわけではない。フリー なルールは確かに存在しているが、それはモノのように主 ても、それを人間が理解して、自らのモラルなり価値観 めるか否かに大きな違いがある。 イエクⅢは観念、態度、意味、記述、信念、見解などを含 いの規則性やパターンを形成することができる。 して内面化してはじめて、そうしたルール るわけではない。仮に法律のように明文化されてい ルがあると言っても、すべてが条文に書か とりわけ、社会的ルールの実在性を認 が実際のふる トウッドに 社会的 たとし れて 超

介とする人間のネット がニューロ・ネットワークであると同様、市場も貨幣 ズムなどに適用しようとする研究も進んでいる。 ている。最近では、 私はハイエクについては今述べてきたような流れで捉え ハイエクの市場像を人間の認知メカニ ワ クである。 は、 ニュ 人間の脳 口 ン単 を媒

築主義に基づいた積極的な自由を掲げながら、全体主義の たように、ハイエクにとって社会主義の最大の問題は、構の権威や抑圧から逃れる「消極的な自由」なのだ。既に見 政府状態を意味するものではなく、ルールにより形成されあると考えている。したがって、自由とはルールがない無 極的な自由を標榜する一党独裁や独裁者が恣意的な権力を ことを目的とする「積極的な自由」ではなく、ル ない状態を意味する。 る秩序の中にあって、そのルール以外の一切の強制を受け 行使する社会は最も忌むべきものである。 てむしろ人間の自由を抑圧するところにある。積 したがって、 それは何かを実現する -ル以外

進化経済学へ

いった。 道徳や哲学などを分野横断的に議論できる素地ができる。 る。そうすると、経済学だけではなく、政治学や倫理学、 ナー、道徳、組織、制度、法まで様々なものが含まれてく 一九六〇年以降ハイエクの議論の幅はこうして広がって ふるまいの社会的ルールと言っても、伝統、慣習からマ

では、 か?つまり、 今述べた ル ルー ル の存在論的ステ ル は一体全体どこに存在している タ スが問題にな

理戦 86

ピュ 間観が存在する。 考えたことで、結果的に、市場を人間の脳に喩えたのでは に、市場秩序をコンピュー あるからだ。ハイエクは、市場社会主義論が主張したよう なネットワークのメタファーとしての市場像、社会観、 人工的に構築するには、脳の機能を完全に解明する必要が であるコンピュー 行錯誤を通じてかろうじて抽象的秩序が自発的に形成維持 上、多くの間違いを犯すけれど、ネットワークにおける試 わかる。 一般均衡理論や新古典派は、 -タは人間の脳と同じ働きを実現できてい ハイエクの自由論や政治思想の背後に、このよう ネットワー ハイエクは、人間は無知であり、認識上、実行 ハイエクの自由とは、内面の自由という タに喩える。しかし、現在の最新のコン クやリンクの自由を意味していること 夕で置換することはできないと 市場を人為的設計 この産物 脳を

されると考えてい

的ダーウィニズム」に強く反対していたので、個体ではな 体が淘汰単位になってしまう。しかし、 位は遺伝子のみだが、これを社会文化のレベルへ移せば個 オ・ダーウィニズムのような遺伝子還元主義では、 で採用した進化論は群選択 (group selection) 理論である。ネ 西錦司と三回(七八年、八一年、八三年)にわたって対談して 想に導入した。ハイエクは一九七○年代に棲み分け論の今 主義の体制選択でも群選択の結果、 が淘汰されるという考え方を採っている。社会主義と資本 く、集団などの個体群、ルールや社会体制など抽象的秩序 社会主義は淘汰されたと考えている。 いるが、ハイエクが経済社会における文化進化を考える上 だからハイエクは一九六〇年代以降、進化論を自らの思 資本主義が生き残り、 ハイエクは「社会 淘汰単

と思われる。

イエクへの批判

思想や社会哲学は大きな位置を占めているが、最後に、若以上見てきたように、現代思想のなかでハイエクの経済 干のハイエクへの批判を述べる。

ではあるかもしれない。 1 エクは自由至上主義者ではないが、市場至上主義者 ハイエクは市場秩序を「自生的秩

実に、 因する 義の下で、経済過程に介入する国家が批判される一方で、 学、政府もその内部で暗黙知や未知を生み出している。 市場があらゆる知識を生み出すわけでも、市場にあらゆる 象と切り離せないはずである。知識の分散性や暗黙性に起 後の経済的不況、倒産や失業の増加、 得る。一九三○年代に全体主義が勢いを得たのは、大恐慌 れることになるのだろうか。 コミュニティや家族は市場によって浸食されている。国 の相互関係を十分考慮に入れていない。咋今の市場原理主 うした多層的、多元的な諸集団・組織・制度と市場秩序 知識が集約、蓄積されるわけではない。例えば、 も、市場がすべてを解決すると考える傾向にある。だが、 ているが、 序」と呼ぶとき、暗黙的に、安定的秩序が成立すると考え コミュニティも存在しているが、総じてハイエクはこ 大きな集団としての国家、小さな集団としての家 「無知」を克服するための「知識問題」について 市場が自生的無秩序やカオスに陥ることもあり コミュニティの衰退は群淘汰から是認さ 貧富の拡大と 企業、 いう現 大 現 ځ

はそれ自身で抽象的秩序として存在するのではなく、 ようなオークション市場では、 もう一つは、貨幣を巡る問題である。 し、貨幣なき市場はありえない。 価値尺度として以外に貨 一般均衡理論が描

> 府の力で解決しようというものであった。しかし、これら 見方とは別の観点から捉えていく必要がある。社会主義経 題点を除去できるのかなど、従来の構築主義や操作主義な 場の実際のダイナミックスをコンピュータ・シミュレ 決するべきはなかろうか。 にはいまや問題が見えてきている。市場の問題や失敗はむ 済計画やマクロ需要管理は、市場の問題や失敗を国家や政 可能な部分であり、 どの部分が必要不可欠な市場機能であり、どの部分は修正 ションなどの新しいツールを使いながら理論的に認識し、 システムである。市場の一般的必要性を踏まえつつも、市 など不均衡累積過程がもたらす不安定性や非効率性を示す のみならず、バブル崩壊、デフレ・スパイラル、金融危機 て市場を見ると、市場は一般均衡理論の見方とは正反 は存在している。 をメディアとして売り手と買い手が個々に実行している相 しろ市場の特性を進化主義的手法で変えることによって解 (あいたい) 取引の集積体、ネットワークとしてのみ市 インフレーションやデフレーションのような景気変動 貨幣を媒介とした個別取引の集合体とし 手を入れればもう少し上手く市場の問

力を持つとともに、 貨幣という視点からこの問題にアプロ 市場のネッ ーション・メディアとして市場形成 ウー ク的性質を規定す ーチして

探っている。これは、上からの構築主義的ないし操作主義 的な制度設計ではなく、進化主義的な制度設計である。 来よりもよ だから、 をいくつかの特性において変化させることによって、 地域通貨の場合のように、 い市場経済社会が自生的に発生する可能性を メディアとしての

る。

ディアを遺伝子レベルと考え、それに人為的突然変異を起 幣でもこれに近いことが考えられる。中間レベルの貨幣メ 誤を繰り返していくわけである。 する。その結果、ミクロとマクロが動的に変化していく。 済パフォ こしてディア特性を変えた時に、表現型レベルのマクロ経 るのがいい み出すには ル でどういう変化が起きるかがわかる。望ましい形質を生 遺伝子工学では、 よりよい進化論的な帰結が出てくるよう、 かを、 マンスとミクロレベルの主体特性をともに変化 いかなる遺伝子型レベルの変異を人為的に加え 試行錯誤的に模索していくのである。 特定の遺伝子を操作すると表現型レ 試行錯 貨 ~

目的とする貨幣発行自由化のプランを提案した。それは、 発行を拡大する、 せることにより、 同種貨幣を複数の民間銀行が自由に発行し、相互に競争さ ハイエクは『貨幣の非国有化論』7(「カセ六)において、 な信用 〔創造によるインフレーションを防止することを 節度なき銀行を自然淘汰するための環境 預金準備を十分持たずに信用創造や通貨

> 設計の一応用例である。 給を分散的に行わせようとするもので、 口的には貨幣価値の安定性を維持しながら、 を意図的に作りだそうとするものであった。 進化主義的な 必要な通貨供 これ は、 マク 制 度

> > 86

ライ は、1 洋経済新報社、1996年、渡辺幹雄『ハイエクと現代自由主義』由の論法』創文社、1994年、西部忠『市場像の系譜学』車 がある。嶋津格『自生的秩序』木鐸社、1985年、橋本努薦めたい。ハイエクを扱った日本語の研究書として以下の 学派の経済学』日本経済評論社、2003年がある。 済評論社、1999年、 春秋社、1996年、 名古屋大学出版会、 Dialogue, The Bartley Institute, 1994(スティーヴン・クレスゲ No S. Kresge and L. Wenar (eds.) Hayek on Hayek, an Autobiographical フ・ウェーナー編、嶋津格訳『ハイエク、ハイエクを語る』 ハイエク自らが書いた自伝類ノーハイエクの一生(特に学問的側面 2000年)の「編者解説」を読むことを 江頭進『F・A・ハイエクの研究』 日本経 尾近裕幸・橋本努編著『オー - トとインタビューか回での)に興味のある 1985年、橋本努『自 · スト からなる読者 リア もの 東

& Sons, また、 論文は村岡到編『原典・社会主義経済計算論争-カオスとロ 理論』実業之日本社、 の彼の本論争関係の論文の多くは Hayek, F.A. Individualism ana ス別冊 No. l』ロゴス社、1996年に新たに訳出されて Hayek (ed.), Collectivist Economic Planning, George ハイエクの上記編著に含まれる二論文、 **兲業之日本社、1950)。ミーゼス論文、ハイエ1935(ハイエク編 迫間真治郎訳『集産主義計画** および、 - カオスとロゴ ハイエク冒頭 ハイエク冒頭 その後 いる。

socialist calculation debate reconsidered, Cambridge University Press, 1985(ドン・ラヴォア著、吉田靖彦訳『社会主義経済計算論争再考 – 対抗と集権的計画編成』青山社、1999年)が優れたいう側面も見られる。著者は『市場像の系譜学』東洋経済新報社、1996年で、オーストリア学派、マルクス派、新古典派にシュンペーターやポランニーなどを加えた多様な論者の暗黙的な市場像が論争を通じて明示化する論争過程を考察した。市場の競場が前3争を通じて明示化する論争過程を考察した。市場の競場が前3争を通じて明示化する論争もそれと類似の機能を果争が nvalry であるならば、学問の論争もそれと類似の機能を果か nvalry であるならば、学問の論争もそれと類似の機能を果か nvalry であるならば、学問の論争もそれと類似の機能を果か nvalry であるならば、学問の論争もそれと類似の機能を果か nvalry であるならば、学問の論争もそれと類似の機能を果かず nvalry であるならば、学問の論争もそれと類似の機能を果かず nvalry であるならば、学問の論争もそれと類似の機能を果からはである。彼らの議論はすべて初めから正しかったといる。 本「論争」の役割と意義に関して、ラヴォアと私の問にはこううラヴォアによる弁護は不要であるだけでなく不適切である。 ン・ラヴォアの著作 Don Lavoie, Rivalry and central planning - The 計算論争については、オーストリア学派の視点から研究したド ネルヴァ書房、 の関連論文は田中真晴・田中秀夫編訳『市場・ 春秋社、1990年)に含まれている。また、1945年以2治元郎・嘉治佐代訳『個人主義と経済秩序』ハイエク全集3、Economic Order, Routledge & Kegan Paul, 1949(ハイエク著、東 した解釈の違いがある。 1986年にも訳出されている。社会主義経済 知識・自由』ミ -以降

これは適切ではないと私は考える。なぜなら、労働者と資本家、competitionと区別するために「対抗」と訳している。しかし、3 ラヴォアの著書の邦訳は rivalry という語を新古典派の や抗争のようなイメージを強く連想させるため、否定的なニュ独占的供給者と独占的消費者のような二者間の利害の対立闘争 ンスが強くなりすぎて、 そこに含まれるべきフェアプレ

> 強さとは何か?-所有権・技術革新・インセンティブ」『比較経4.ライバル競争については、より詳しくは「資本主義経済のいう訳の方がいいだろう。 の言葉を悪いコノテーションで使うはずがないのだから、それに消えてしまうからである。ラヴォアが、自派を特徴づけるこおける「ライバル」「競い合い」のような肯定的な意味が完全 る。 している状況を問題にする言葉として肯定的に理解すべきであ はむしろ寡占ないし独占的競争のように三者以上が相互に競争 拙著では、rivalry に肯定的なニュアンスを含ませるため っ「ラ

5 両側面から「無知」と「未知」を区別してライバル競争を論じた。済体制研究』No. 5, 1998 年を見よ。そこでは、「アメとムチ」の 20(4), 1988 Caldwell, B. Hayek's Transformation, History of Political Economy の

ポリティカル・エコノミー』法政大学出版局、2006年) 6 Fleetwood, S., Hayek's Political Economy, Routledge, 1995 (?) ウッド著、 佐々木憲介・西部忠・原伸子訳 『ハイエクの

論』 東洋経済新報社、 Institute of Economic Affairs, 1976(川口慎二訳『貨幣発行自由化 Hayek, F. A. Denationalization of Money: The Argument Refined, 1988年)

ル・エコノミー』など書スティーヴ・フリ 授に 済学のフロンティア』『地域通貨を知ろう』授(進化経済学、経済思想)。一九六二年 ん(進化 まこと など。 ア』『地域通貨を知ろう』『市場像の系譜学』経済思想)。一九六二年生まれ。著著『進北海道大学大学院経済学研究科・経済学部 ウッ (共訳) ョハ イ エクのポリテ